弘前城石垣修理

第２回
～石切丁場と石垣普請を支えた技術～

△北の郭から見た天守と本丸石垣

前回、弘前城本丸を巡る石垣が完成したのは、築城から約 80 年後の元禄年間であったことを紹介しました。では、石垣をつくる石材は、どこから運ばれてきたのでしょうか。

石垣のための石材を採取し、選び割り、運搬までの作業を行った場所を、「石切丁場（いしきりちょうば）」と呼んでいました。

弘前藩の石切丁場は、慶長 16 年（1611）弘前城築城時の、長勝寺南西にあったとされる石森、元禄期の石垣普請（ふしん）や享保４年（1719）の本丸戌亥櫓（いぬいやぐら）台石垣に使用された如来瀬（にょらいせ）、享保 19 年（1734）の本丸西側石垣に使用された兼平（かねひら）などが知られています。弘前城のように、ひとつの城郭の石垣において数種類の石材がみられる原因には、産出地での石材の不足や、運搬･加工技術の進展といった理由から、石切丁場や石材の加工度を変更したことにあると考えられます。

❶

石材の切り出しには、あらかじめノミで穴（矢穴〈やあな〉）を直線状に多数彫っておき、矢（くさび）をゲンノウで打ち込むことで割る方法が発達しました。石切丁場で選び割られた石材は、牛車や雪船（そり）で運搬されたことが記録に残っています。雪船は、弘前藩における気候環境の特徴を生かした有効な運搬方法でした。

石材を切り出し、運んだら、今度はそれを積む技術が必要です。石積み技術は、近江国穴太（おうみのくにあのう・現在の滋賀県大津市）から発生した石垣築成の技術者集団・「穴太」の活躍によって全国的に普及したと考えられていますが、その技術自体は文禄・慶長期（1592 ～ 1615 頃）から元和（げんな）・寛永期（1615 ～ 1645 頃）へと移る過程において、自然石を主に用いる野面（のづら）積みから、切石による間知（けんち）積みへと移行していきます。弘前城でも、本丸北東側に積まれている石垣には、自然石もしくは加工の少ない石材を用いていますが、南東側の元禄期の石垣には、形を整えた切石を使用しています。このように石垣普請には、当時のさまざまな技術が用いられているのです。

※石切丁場跡を見学する際には、クマ・ハチ・ヘビなどが出没する恐れがありますので、十分ご注意下さい。

❷

❸

①如来瀬石切丁場跡（弘前市岩木地区）。奥に見える山が、石切丁場であった。
②如来瀬石切丁場跡で発見された石材。石材表面に並んでいる長方形の穴は、石切職人が石を切り分けるために開けたもので、「矢穴」と呼ばれます。
③弘前城内濠から出土した鉄ノミ（石に穴を彫る道具）。現在、弘前市立博物館ホールに展示中（9 月 15 日まで）。

※弘前城本丸石垣修理事業について、詳しくは下記 URL をご覧下さい。
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/kanko/shisetsu/park/ishigaki.html
■問い合わせ先　公園緑地課弘前城整備活用推進室（弘前公園緑の相談所内、☎ 33・8739）